



舞太鼓「あすか組」主宰
飛鳥大五郎さん

**技術を支える
心の向上を!!**

インパクトのあるめまぐるしかった1年が終わろうとしている。この時季になるとなぜだか分からないが、決まって普代を思い出す。投宿した宿(海の家まついそ)の枕元で聞いた荒波の音、通りの軒下につるしてあったサケの干物、それに降りかかる雪等々、ふだい荒磯太鼓が12月にお披露目したからだろうか?あれから14年、皆よく頑張っているものだ。第1期生が活躍している中、今回新しいメンバーが8人も陣列に加わったとのこと。ほほ笑ましくも、頼もしくも、力強い限りである。

顔を合わせて、直接激励させて頂きたいところだが、とり急ぎ書面にて。

恐らく遊んでいる人はいないであろうと思われる。その忙しい中、時間を割いてのトライである。技術の向上も大事だが、その技術を支えられる心の成長に期待したい。太鼓道場での闘いと成長が即、皆さん的社会生活に反映されることを目指して頑張って頂きたい!

もし、心身共に疲れたら、別にめずらしくもないだろうが、改めて、あの荒磯の波動に耳を傾けてみてはどうだろうか――?

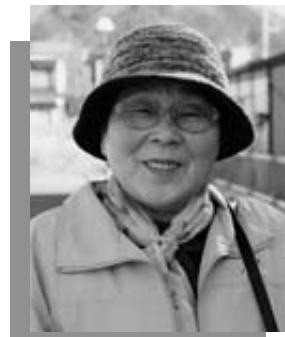
たゆまず、ゆるまず、押し寄せてくるあの無限とも思えるほどの、力強さ、生命力、躍動するエネルギーに身をまかせ、チャージできたら、イザ明日へ!



中村 秀男さん
(77歳・上区)

**仲間を増やし
継げだけでー**

**若い人々は
頑張つてよ!!**



坂下ひろ子さん
(73歳・緑区)

チャリティー演芸会や海産まつりで荒磯太鼓の発表を見ました。太鼓の音を聴いていると、気持ちがいいし、元気がわいてきます。何だか年を取っていてもウキウキしてきます。若い人たちが、一生懸命に頑張っているのはうれしいですね。これからもずっと続けて、普代といったら「荒磯太鼓」って言われるように頑張ってください。

このメンバーには稽古を始めたばかりの新メンバー8人のステージを初めて目にしたのは、昨年12月のチャリティーフェスティバルでした。若者が真剣に和太鼓を打ち鳴らす姿に感動したのを覚えていた。初めて稽古場を訪れたのは今年の秋。すさまじい稽古に圧倒され「大変だね」と問い合わせると返ってきた言葉は「楽しですよ」。「つらいです」という返事を期待していた私にとって予想外だった。取材を続けるうちに分かったことがあります。それは彼らが稽古を通して、常に自分の可能性にチャレンジしていること、今まで感じたことのない喜びや感動を自分の中に宿し始めていることだった。

たくさんの若者が彼らのように何かに打ち込み、夢や希望を持ち続けられたら、きっと充実した人生を送れるのではないか――。そんなふうに感じ、また、若者に限らずそんな人たちがあふれる村であつて欲しいと思つた。彼らは今日も元気に稽古場に向かう。ふだい荒磯太鼓を未来へ響かせるために――。輝く人生を自分たちで切り開くために――。

特集 取材を終えて

伝統は時がたつてから、残つていれば伝統になる。それは結果であつて大切なのは継いでいく過程。上手とか下手とかではない。まずは、稽古をするとき決めたときに稽古場に足を運べるかどうかだと思う。そこで责任感も生まれるし、仲間意識も生まれる。いいときばかりではない。必ず壁にぶつかる。そんなとき仲間で励まし合い、先輩がアドバイスをする。そういう関係をつくっていただきたい。

もう一つは、和太鼓を通じて何を学ぶかだと思う。それ

は人の話を聞く耳を持つこと

和太鼓の伝承を通して人として成長してほしい

であり、目配り、気配り、思

い

や

り

の

心

を

持

つ

こと

で

あ

り

な

こ

と

を

学

ぶ

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と

を

ま

る

こ

と